

差異を差別にではなく学びへと転換する

津守 眞

現代はそれぞれの家庭が、いろいろの問題を抱えている。外からは平穏で幸せに見える家庭でも、母子家庭だったり、父子家庭だったりする。あるところでは、障壁の子がいたり、手のかかる老人がいたりする。そのような差異を差別とするのではなく、人生の学びとするにはどうしたらよいのだろうか。

流れが妨げられたとき

私の身近な家庭でのことである。その子の家は新築の一軒家に引っ越したばかりだった。私が訪問したとき、その家の中で未っ子のその子は濡れ雑巾を振り回して、あたりが水浸しになっていた。兄、姉

たちの声、それを止める声などでその家は賑やかだった。その子は洗面所で水を出し、シャワーを指差して、キーと叫んだ。私が水を出してあげると、その子は静かになったが、周りの人たちに水がかかった。その子がたえずキーと言うのは、その子が何かをするたびに止められるからだということは明らかだった。その子の生活は絶えず中断されて流れない。私は濡れてもいい服装をして、一歳半のその子と水遊びをした。その子の服を脱がせて湯を出したらすぐに大便をした。緊張がほどけたのだから。しばらくじっとして、私がきれいにするのを待つ。

その子はバケツにタオルを何枚も入れ、一枚ずつ、バケツの縁に丁寧にかけた。私はその子と一緒にそれを眺めた。きれいに並んだタオルは芸術作品のように思えた。郊外にあるその子の家では夕方になるとカッコウの鳴き声が聞こえる。その子は

「アッオウ」と言って、キヤキヤと喜びの声をあげた。その子が何かを取って欲しがるときに、私は手桶や石鹸を取ってあげて、そのたびに私は「この子の言うことは本当なんだ」と自分に言い聞かせ、この子の笑い顔を見て笑った。途中で寒かろうと思ってお風呂の中に入れてようとしたが、イヤと言って、身をよじる。そういうときの意思表示ははっきりしている。私は一つひとつ、そのときのその子の心に応えようと努めた。雑巾をかける喜び、容器をひっくり返す喜び、容器に水を入れる喜び。一瞬、一瞬に思いが満たされ喜びがあった。その間に、私はその子との距離が近くなり、中断されて滞った流れが再び流れ始めた。その子も私を信頼する親しみが増してきた。

四人の子どものいるその子の家は、隣家から絶えずうるさいと文句を言われたり、電話がかかってくる、両親にとっては毎日がストレスの連続だった。

その子は隣家の人と目を合わせなくなっていた。

小学生の姉が、「ジジちゃんはパンツ一枚になって、桶に腰掛けて一緒に水遊びをする」と母親に言った。兄妹たちも絶えず叱るのは良くないとわかってきたようだった。

父親も家に帰ると絶えず緊張していなければならぬと語った。高いローンをかかえ引越しても、子どもたちの笑顔がなかったら、何のための苦労かわからなくなってしまうだろう。父親は憔悴して家に帰ってきた。引越してから、急に痩せたと言った。会社に行っても昼休みのときなど、今頃家ではどうしているだろうと思うと心配でと涙ぐむ。母親が炎天下を近所から文句を言われないうちにと朝から自転車に小さい子を乗せて走っているのかと思うと、何もしてあげられないのが申し訳なくて言う。「障碍をもつ子の親はどうなんだろう」。父親の言葉は真に迫っていた。

愛育養護学校で

キーと声を出したり、物を投げたりして、幼稚園で他の子たちと一緒にやっついていられないと言われ、この学校に相談に来る人が増えている。運動会や発表会などの行事のときが多い。生活の流れが妨げられ、中断されて子どもが本当になりたいことが満たされていないことが多いかを示しているのではないか。

長年にわたって愛育養護学校をしばしば訪問された佐藤学さんが、『学びとケアで育つ』（小学館 二〇〇五）の冒頭で、愛育養護学校の特色として二つのことを挙げておられる。

第一は、子どもが学校の主人公だということである。実際、二〇数年前に私がこの学校の校長になったときに考えたのはこれであった。たとえ家庭や社会の生活で誤解されたり、自分の存在の価値を疑う

ような体験をしている場合も、ここに来れば自分が主人公になって遊び、活動し、くつろぐことができ、そういう学校をつくりたいと私は考えた。主人公になるとは、佐藤によれば、『自らの願いと意志によって一日の生活と実践を創造すること』である。このように簡潔な語で示されるといつそう明瞭である。願いは無意識に心の奥に湧き起こる内なる力であり、意志は意識的な、時には決意をもってする主体的行為である。子どもが叫ぶ場合には両方があるだろう。子どもがわがままと見えるほどに自己を主張するとき、その叫びに耳を傾けることがなかったら保育も教育も始まらない。

第二の特色は、『発達の壁、あるいは障碍の捉え方』であると佐藤は指摘する。佐藤学によれば、『学びの実践は差異と出合うところに成立する』。障碍は個人に内在するのではなく、社会（おとな）との関係の中にある。大人と子どもが協同でその

壁を克服すること、すなわち、『個性や経験の差異を差別にではなく学びへと転換する実践が求められている』。障碍をもつ子ども（人）を別の種類の人間として自分たちとは違う別枠に入れて、いわば片付けてしまうことを私はしたくない。診断名や呼び名に振り回されてはならない。その子と直接に触れて、そこでわかったことを実践の根拠とすることから保育は始まる。自分の常識には合わない他者の行動に出合うとき、私共は行動をその子の心の表現として見る必要に迫られる。そこでは自分の考えの枠組みを根底から変えねばならないことも起こる。知識の網の目に位置づけることが理解ではなく、自身が変えられることが理解の本質である。

大人も子どももそれぞれ違っているのにそれをひとつの枠に入れようとするので、あの子は異常だと考えて、自分の中に壁を生み、他人との間に壁をつくる。それを克服してひとつの生活をつくるのが実

践である。常識に揃えようとすると、そこが差別を生む地盤にもなる。どの場合にも、そ



れを克服する実践がなければ抽象的、観念的になる。これは人の一生を通して終わることのない実践である。その実践を継続させる力は、広い教養と文化である。私共はこの社会に生きて違う経験をして

いる人たちと交わり、常に柔軟に変えられる自分自身をつくらねばならない。それなしには人生は完結しないほど難しい作業である。

このように考えると、第一と第二はつながっている。だれでも、自分の人生を全うするのに、差異や障碍を別枠に入れて済ますことはできない。これまでも私が実現したいと願いつつ、日々当面した保育の体験をこの誌上で語ってきたが、私が言おうとして言いきれなかったことを、佐藤学さんは簡潔に指摘

されている。

ある日

いつも棒を振り回しているS夫が二階の窓から、庭で遊ぶ子どもをジッと見ていた。他の子との間には空間的距離がある。幼稚園では乱暴とレットルを貼られている子どもだが、この子の傍らで話しかけ、交わりながら見ていると、にこにこして私を見る。親しみ深いのだが、私から触られるのはキラいなようである。棒を振り回しているときには相手は近寄らない。棒を振り回す行動には、乱暴という一つの解釈があるのでない。担任はS夫を恥ずかしがり屋だと言う。相手を近寄らせないための行動と考える方が妥当である。私がこの子に無神経に近付くのではなく、でも近付くのをやめてしまうのではなく、控えめなやりとりをしていると別の展開がある。

その直後、別の元気の良い子が高いところから飛

び下りては若い男性職員に抱きついて笑い合うのを熱心に見ていた。S夫もひとりでひっくり返って大笑いしていた。高いところから飛び下りるのを受けるのだから、若い職員にとっても大きなエネルギーを要していることは明らかで、S夫まで誘って遊ぶ余裕はなかった。もしも傍らにいた私が若い職員と同じようにその子が飛び下りるのを受けていたら違う展開があったかもしれない。しかし、私にはそれだけの体力はないと自分で思ってしまった。この思い方には問題がある。年齢を考えて控えめにするのは必要だが、自分にもできる分がある。老人のすることではないとも考えていたら、大事な保育のチャンス逃してしまう。これは自分の判断で決めることである。差異と差別を克服するには、「願いと意志」を働かせる、控えめだが積極的な実践が保育には必要である。佐藤学が言うように「この複雑で高度な実践研究」は、どの年齢の人にもそれぞ

れに違った仕方で求められている。

「差異を差別にではなく

学びへと転換する実践」を

他の学校や園では断られた子どもたちの通える場所をつくりたいと考えたところから愛育養護学校は始まった。今もそうである。子どもたちの性質や障
碍は違っても、どんな子どもが来ても、ひとりの人間としての願いと意志を尊重するのが保育である。「差異を差別にではなく学びへと転換する実践」をしたと思う。このことは昔も今も変わらない。流れが妨げられて、水遊びを始める子どもに向かう大人の覚悟。子どもがそれを始めた願望と意志を信頼し続けること。大人の都合の悪いことをも子どもの表現として理解し、その奥にある心に応えようとする。そのことが未来を開く。学校でも家庭でも。
(保育研究者)